
しろがねと月

ふとん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しろがねと月

【Nコード】

N8272K

【作者名】

ふとん

【あらすじ】

あの日、友達と買い物に行かなければ。

あの道を通らなければ。

あの男に出会わなければ、きっと、私は今も日常に甘えていられたのに。

忘れもしないあの夕暮れ時、私はあの男に出会ってしまった。

白夜 1

あの日、アイツに会ったことは、私の人生の中で一番不幸な出来事だったに違いない。

私は、今でもそう信じている。

あの日

もし、加奈と学校帰りに買い物へ行ったりしなければ

もし、遅いからといって公園を突っ切ろうなどと考えたりしなければ

私は、平凡で退屈な毎日に浸かっていられたのだから。

その日、夕ゆづはいつもの道をただ、いつものように歩いていた。

太陽が西の空に帰宅して久しい時間である。電柱と家の灯りが点々とあるだけの道は、何処にでもありそうな暗がりの薄気味悪い道である。その隣にお慰み程度の林を抱え込んだ公園が住んでいるのだから相乗効果はなおのこと。路上を照らす電灯も、幾重にも枝を伸ばした林を突き破る供給力はない。

そんな暗がりから大きな人影が出てこようものなら、女子高生はまず「チカン！ 撃退！」と叫んでみたくなる。

だから夕も例にもれることなく叫んだ。

「近寄ったら警察呼ぶからっ！」

しかし、影はぐらりと傾いたかと思うと、夕に向かって倒れこんだ。

突然のことに避けきれず、夕は思わぬ重量に声を無くして自分も道路に尻餅をつく。

反動で膝の上に乗ったのは、人間の頭。暗がりにも目をこらせば、若い男のようだ。苦しげに顔を歪めている。

「……だ、大丈夫ですか？」

恐る恐る声をかけるが、男はセーターの胸を掴んで横たわったまま、うめくだけだ。よく見れば、セーターは、夜目にも鮮やかな赤に濡れていた。

半信半疑だった夕の頭が冷水を浴びたように冷える。背筋が凍るのを感じながら、夕は急いで鞆から携帯電話を引き抜いた。

何があつたのかは知らないが、警察と、まずは救急車だ。

冴えているのか、慌てているのかわからないのに、携帯電話の番号キーを上手く押せない。

夕闇は意外と寒く、かじかんだ手がセーターを漏らす血のせいで細かく震えていた。

昼間は頼りない公園の林が今は夜行性の動物のように、ざわざわと騒ぐ。

発信ボタンの音がやけに響いた。

ようやくかかるコールが、夕に幾らかの安心感をもたらす。

「ちっ」

不機嫌の塊を吐き出すような低い舌打ち。

反射的に顔を上げていた。

木々がざわめいていたのは、この男のせいか。

木立の間からぬるりと長身の影が、薄闇を抜け出す。

林から現れたのは、三叉の長い槍を持った男だった。春先だというのに黒いコートを着込んだ男は、見た目から非現実的だ。闇に溶けるような黒髪が、軽く見積もって膝あたりまで波打っているのだ。

薄闇になびけば、十二単の女房のようだが、いかつい槍を持った姿は何処か神話めいていた。

人間の魂を狩りに来るといふ、死神のようだ。

黒い死神は、夕と膝の上の男を見とめて、白い顔を歪めた。鼻梁の整った、彫りの深い顔立ちである。

夕は双眸に落ちた長いまつげの下にある漆黒の瞳に射すくめられた。

「……………コイツの女……………て、わけでもなさそうだな」

特別低くも高くもない、耳に残る男の声。

携帯電話のコールが鳴るなかで、夕は死神から目を離せなくなっていた。

死神の美貌に吞まれたわけではない。

もつと本能的な、捕食者に睨まれた獲物のように。

死神が靴音も高く近づいて来ても、動けない。

死神は煩わしそうにコールが続く携帯電話を夕から取り上げ、手の中に収めると音を切った。そして夕を見下ろすと、

「……………まあ、いいか。運が悪かったな。おじよーちゃん」

口の端を上げた。

「え……………」

間拔けな声と同時に、死神の槍が振り上げられる。

死ぬ。

頭の中で誰かが告げた。

白夜 2

目を閉じる暇もない。

切っ先が、青ざめた首筋をかする。

しかし、覚悟していたほどの痛みはなく、薄皮を切ったときのよ
うな鈍い熱が残った。

体が浮いていることに気がついたのはその時になってから。

誰かに抱きかかえられている。

自分では到底出しえない速さで、死神の黒コートが遠ざかった。

「……ごめん」

しぼり出すように耳元で囁かれて、ようやく我に返った。

「さっきの人……」

先ほどまで膝に乗せていた男だ。セーターの胸には、しつとりと
血が染み付いている。

顔を上げると、彼も冷や汗の浮いた真っ青な顔で安心させるよう
に少し笑んだ。冬の住宅街を女子高生一人抱えて駆けているという
のに無理もいところだ。

「……巻き込んでごめん。……君は、引き離れたところから逃げて

……」

穏やかに笑う人だ。温和そうな性格がにじんでいる。

「でも、あなたは……」

血まみれで、あの死神をどうしようと言っのだろうか。

「僕は、まだ、彼と……」

言いかけて、言葉を切る。彼は路地裏から少し離れた建材置き場
で夕を自分の腕から優しく降ろしてくれた。

「隠れて」

短く告げて、自分は建材の前に立った。

言われた通り、夕は大人しく積み上げられた鉄骨の影に身を潜め
て、外の様子が気になるので顔の端だけ覗かせた。

近づいてくる足音が一つ。また一つ。

「……………君が鬼だと、鬼ごっこにならないね」

苦笑したのは男の方だった。

「追いかけるのは得意なんでね」

軽口とともに、建材置き場の埃と一緒に黒いコートが翻る。

死神だ。

「でも、そろそろ飽きてきたぜ。鬼の役は」

神秘的な容貌に似合わず、死神はがりがりど艶やかな頭をかいた。

「僕の話を、聞いてくれる気になった？」

苦しい息を隠して、男は死神を前にしても、優しく笑んだ。

「あー…ああ。あの話ね」

面倒臭そうに死神は目を細める。

「僕は……………」

「却下だ」

言いかけた男の言葉を遮り、死神は切り捨てた。

「アンタはどうか知らないが、他の奴等は納得しないさ」

「それは、僕が……………」

「一人でここに寄越された意味、わかってんだろ？」

取り付く島もなく、男は押し黙った。

「なら話し合う余地は、お互い無いってことさ」

死神は、自分の呟きだけ残して地面を蹴った。

手にした大振りの槍を、夕に突きつけた時とは段違いの速さで突き出している。

男は眉間にしわを刻んで、右手を前へと突き出す。槍の切っ先が手に触れる直前に、細かい砂のような粒が集まったかと思うと、槍が甲高い音とともに弾かれた。

死神は反応に応じて、少し後ろへと飛んだ。

男の手には、中世の騎士が持っていたようなランスが握られている。痩身には似合わない重そうなランスを、軽々と片手に持ち、構え

る。

死神は何も言わずに、再び槍を構えた。

相対したのはほんの数秒で、どちらからともなく走り出して、ランスと槍がぶつかる。

槍が刺突を繰り返せば、ランスが弾いて突き返す。次いでランスは死神の足を狙って切っ先を突くが、死神はそれより早く、姿に似合わない軽業師のように助走もなく空中に飛んだ。

男は、夕が隠れている鉄骨から死神を離そうとしている。通りすがりの夕を、逃がそうとしている。

逃げなければ。

夕は思い立って息を殺して建材置き場の裏手に足を向けた。だが、甲高い金属音とともに、激しい咳を聞きとめて、振り返る。

男が地面に膝をついている。

無理だったのだ。

あのセーターの血は、嘘じゃない。

死神が、男の取り落としたランスを拾い上げた。そのランスで男を串刺しにしようというのか。

夕は、走り出した。

鞆を捨てて、なえた足でよくここまで走れたと感心するほど、速かった。

気がつけば、男の前でかばうように腕を広げている。

「……………なんだ、おまえか」

死神は面白くなさそうに溜息をつく。黒の深い双眸で睨まれて、夕は震える手足に力を入れる。

「……………逃げて……………」

背中で枯れた男の声を聞いて、夕は真っ直ぐ正面の死神を睨んだ。夕も背の低い方ではないが、死神は威圧的でさえあるほど長身だった。

「やめて。この人はもう動けないんだから」

「ガキのお遊戯じゃねえんだよ」

長い指が夕の胸倉を掴み上げる。

「っ！」

息がつまると同時に、足から地面が消えた。死神が、片手で夕を持ち上げたのだ。

夕はもがいて死神の指をつかむが、息苦しさは夜空を見上げる。いつのまにか高く上った半月がにじんだ。晴れた闇に白い苦悶がもれる。

「やめろっ」

男の声が聞こえた。

次の瞬間、夕は死神に地面へと落とされた。解放されたはいいが、肩を強く打って、夕は小さく悲鳴を上げた。

それと同時に。

鈍い。

恐ろしく鈍い音が響いた。

とっさに振り返った夕は、自分を呪った。

ランスの先から赤い滴が垂れている。飛び散った飛沫はほとんどなかった。

ただ、ランスの切っ先が、男の胸を食い破っている。

頂垂れた顔から、血が流れた。

心臓が壊れたように鳴った。

声は、出なかった。

いつぞ叫ぶことができれば、恐怖で我を忘れることができたのかもしれない。

だが、さきほど締め上げられたせい、喉は渴いた声しか出なかった。

目が乾いているのに、瞬きもできず、さっきまで話していたはずの男が、ランスの先から捨てられるのを見つめている。

死神はすぐ目の前。

間髪入れずに夕の喉下にランスを突きつける。が、ふと思い出したように夕に視線を合わせてしゃがみこんだ。

「お前、名前は？」

今までの緊張感が台無しになるほど頓狂な質問だ。だが、いぶかりながらも怯えた夕は応えるしかなかった。

「……皇月 夕」

死神が、初めて余裕を崩して目を見開いた。

「まさか……！」

その声は霞む。

夕の胸に、白い光が食い込んだのだ。薄暗い辺りを一瞬だけ照らして、消える。

次に、夕は右の胸に焼け付くような痛みで脳天を貫かれた。

「あああああつ！」

嗚咽と苦悶が体と喉から弾きだされ、未だかつて経験したことのない痛みで、夕は胸をかきむしる。

死神が刺したのか。

いや。

死神は動いていなかった。

ではなぜ、胸を刺し貫かれたような痛みが夕に起こったのか。

「クソツ！」

死神は乱暴に夕の肩をつかむ。そして地面に押し倒した。突然、身に危険を感じて、夕は痛みを任せて手足をばたつかせるが、死神に組み敷かれる。

「落ち着け」

低く、言う。

「何もしねえよ」

夕の痛みがひきはしなかったが、少しだけ息苦しさはなくなった。「そうだ。そのままゆっくり息をしろ」

苦しかったのは、痛みあまり、空気を吸い過ぎていたせいだったようだ。

死神の長い髪が、夕の周りだけカーテンのようにまとわりついている。柔らかく体に伝う感覚が、少し戻ってきていた。

痛みはある。限界まで開いた目から、涙が溢れている。だが、落ち着きだした体は少しずつ痛みの警告を和らげていった。

死神は少し息をつく、まだ起き上がるまで力の入らない夕を抱え上げる。

律儀に夕の捨てた鞆も拾い上げると、ゆっくりと歩きだした。死神は、資材置き場から大通りには出ず、暗くて細い路地裏へ入った。

終始無言のまま、十五分ほど細い道ばかりを通って辿り着いたのは、ごくごく普通の、賃貸マンションだった。死神はエレベーターを使わず五階まで昇ると、一角の部屋の鍵を開ける。

灯りもつけずに家へあがりこんでソファの上に夕を寝かせると鞆を脇に置いた。

そして、自分はサイドテーブルの脇に座り込んで息をついた。

「…選べ」

暗いはずの部屋で、闇よりも暗い死神に目だけが夕を捕えた。

「その激痛と一緒に生きていくか、自殺するか」

冗談、ではない。

この死ぬほどの痛みは現実だ。

「その痛みは、これから何度も繰り返される。死ぬまでな」

死神が殺してくれれば、今すぐ死ぬ。

「俺は直接手を出すことはできない。やるなら自分でやれ」

眼光がうつろう。死神は自分の懐から細いナイフを取り出すと、夕に握らせる。

「朝までに答えを出せ」

夕は辛うじて動く腕を動かして、胸に当てた。自分を殺すにも、これでは力が足りずに痛みばかりが増すだけだ。

まぶたが、冷たい手の平に落とされた。そのまま暗闇をも遮るように覆われる。

死神の手だとわかってはいたが、振り払うこともできず、夕はナ

イフの柄を握りしめた。

白夜 3

緩やかに波打ち始めた少女の呼吸を確かめて、彼は一先ず息をついた。

ナイフの柄を握りしめる細い手が、痛みを耐えるように時折こわばる。

最悪だ。

これほどの不運は、ここ最近ではお目にかかったことがない。

ソファに横たわるか細い娘なら、右手に少し力をこめるだけで殺すことができる。だが、何も知らずに実行していれば、己の身が危なかった。

不幸中の幸いということか。

体力が戻り次第、自殺でもしてくれれば、遺書と一緒に両親の元へ返してやることもできるだろう。

あの痛みには、この少女が耐えられるとは思えない。

何度も何度も、夢の中でさえ繰り返される肉体的な痛みと、精神の絶望に、通りかかっただけの、何の予備知識もないこの少女が耐えられるわけがないのだ。

耐える必要はない。

来世でまた、幸せな人生を送ればいいだけのことだ。

少女の額から手の平を放す。

まだ幼い少女だ。

肩までの黒髪に、高校の制服。細いだけが取柄の、普通の少女。

頬にかかる髪を横へ流してやると、嫌そうに顔をしかめた。

意識もないのに嫌いな人間はわかるらしい。

思わず苦笑して、少女の顔を改めて眺める。

顔立ちが悪くない。だが、凜々しい眉と、長く整えられたまつげ、開けば火のつくような目が、彼女を少年のように見せる。形はいいが、薄い唇から紡ぎ出されるのは、十代の少女にして少し低いハス

キーボイスだった。美人ではない、とはいわないが、どうしても酷薄な、近寄り難い雰囲気がある。

学校では、少し浮いた存在だろう。

どうでもいいことに呆れて、また苦笑する。

どうせ明日の朝までの付き合いだ。このままソファに寝かせておくだけでいい。

立ち上がって、トレンチコートを脱ぎかかる。

だが、窓ガラスを伝って耳障りな警告音が響いた。

まだ、夜は終わらないらしい。

気がつくのと、手の中のナイフがなかった。取り上げられたのだと気付いたのは、死神が慌てた様子で部屋の隅に投げたのを見たからだ。

続いて懐から同じようなナイフを取り出してリビングの四隅に投げる。しかし、鋭い刺突にも関わらず、壁に突き立つ音はない。

ソファから起き上がって見ると、ナイフが部屋の隅でピアノ線もないのに空中で浮いている。

死神は、黒いコートを脱いで夕に頭から被せた。ずっしりと重い。こんなものを着て動いていたらしい。夕では歩くことさえままならない。

「どうだ。痛みはひいたか」

窓から夕を庇うように立って、死神は顔も向けずに尋ねてくる。

ジーパンに、着崩したワイシャツ姿だ。異常なほど長い髪を除けば、意外なほど普通に見えた。

「……そういえば、ない」

痛みはひいている。そのことに安堵したのか、体から熱がひいたようだ。

「それは被つとけ。ソファの下でじっとしておくんだ」

布団を被るようにコートにくるまった夕の頭を、死神は子供をあやすように広い手でポンと叩く。

「……何？」

「喋るな」

窓ガラスを盛大な空気圧が叩いた。一瞬にして、ガラスに蜘蛛の巣状のヒビが入る。

もう一度。

ドツと強烈な突風が吹いたかと思うとガラスは呆気なく碎け散った。

夕は死神に言われるまでもなくソファの下にうずくまる。その上にキラキラとガラスの破片が重力に従って落ちてきた。

「お久しぶりねえ。キサラギ」

ベランダから、女の声が響いてきた。艶やかな、誘うような声だ。ソファの下から顔を上げて盗み見ると、やはり、妙齡の蟲惑的な美女がベランダの主役のように立っている。ミニスカートの肢体が半月の光に照らされて、淡く波打つ茶色の髪が夜風に舞えば、妖精のようでもあった。だが、彼女はひどく人間臭のする艶やかな笑みを湛えている。

「相変わらず、派手なご登場だな」

低く、死神は笑う。ところどころ白い顔に傷がある。まともにガラスの破片を受けたようだ。

「アナタこそどうしたの？ ネズミみたいに逃げ回るのがお得意のはずでしょう」

甘やかな毒を含んだ声で、美女は死神を舐めるように赤いルージュの端を上げた。

「居場所がこんなに早く見つかるなら、レンもアナタを探して旅行になんて行かなくても済んだでしょうに」

レンという名前に、死神の指が少しだけ動いた。美女は気がつかなかったのか、そのまま緩やかな毒舌を続ける。

「今更、アナタを捜すなんてサク達だけでいいのに、このアタシまで狩りだされてうんざりしてたの。だって、アナタったら口クな力もないくせに逃げることだけは上手なんですもの。世界中探すなんてことになったらどうしようかと思ったわ」

くすくす笑いながら、美女は破片が散らかったフローリングをハイヒールで踏みつけた。

「ねえ、これも運命っていうのかしら？」

「今日はえらく能弁だな」

「だって、これくらいはしてあげないと。千年のお付き合いは長いわ」

せんねん。

死神の家と、美女の家は、相当な旧家なのだろうか。それとも、「アナタが死んだあと、お葬式はあげられないんですもの」

美女は微笑みながら腕を振り上げる。その微風が、サイドテーブルを切り裂いていった。

「……本気か」

「アタシ、嘘は嫌いなもの」

少女のようにつこりと微笑む美女を睨んで、死神は左手を少し動かした。いつか見たように、砂が彼の手に集まって、瞬きの間にしっかりとした柄が手の平に収まっている。死神は三叉の槍を片手に構えた。

「いつだって、テメエに殺されてやるわけにはいかねえんだよ」

死神は動かない。代わりに、部屋の四隅にあったナイフが、自由意志を持ったように美女に向かって突撃していった。

美女は鼻で笑って、腕を一振りする。ナイフは風に巻かれて飛散するが、あきらめないのか突撃を繰り返す。

その数瞬に、夕の体がさらわれた。

コートごと抱き上げたのは、当然死神だ。あつと言う間に荷物のように担ぎ上げられて、抗議もできないまま部屋を出て行く。

美女がナイフに道行を阻まれながら罵っていたが、死神は聞く耳もないようだ。

階段を降りるのかと思いきや、死神は玄関先の廊下の手すりに足をかけた。廊下は渡り廊下のようになっていて、手すりの下にはマンションの駐車場が見える。

「な、何するの……」

まさか。

死神は夕の口を手で塞ぐ。

片足に少し反動をつけただけで、あっけなく五階から空中に飛び出した。一瞬の浮遊感のあと、あとは自由落下が待っている。地面に激突すれば、まず死神と心中だ。

だが。

死神はあろうことか道路と衝突間近で夕を抱えたままクルリと体をひねった。そのまま逆上がりの要領でふわりと回転すると、すでに地面だ。

地面に足がついた時には、軽い着地音だけが、駐車場で鳴るのみ。死神は夕を地面に降ろすと、彼女からコートを取り上げて、代わりに何時の間にも持ち出したのか夕の鞆を押し付けてくる。

そして自分はジーンパンのポケットからキーケースを取り出す。少し視線を彷徨させたあと、グレーのセダンにキーを向けてドアを開けると、夕を後部座席に放り込む。

自分はコートと一緒に運転席へおさまると、キーをプラグに押し込んだ。

状況の飲み込めない夕を尻目に、死神はハンドルを握ったまま、静かに息をつく。

「良かったな。靴はいたままで」

緊張感のないことを言われて、夕は自分の足に目をやる。

確かに、ソファに寝かされた時も靴をはいたままだった。

「あー…靴なんか脱ぐんじゃないかなかったぜ」

死神は素足で出てきたらしい。素足のまま五階から飛び降りるような真似をするのだ。恐ろしいというより、頭の回路が二、三本焼ききれているのではないかと思う。

「おい、そこにサンダルないか」

言われて、後部座席の下にあった男物のサンダルを見つけた。

手を差し出してくるので、乗せてやる。

「……ねえ、ここでじっとしていいの？」

「いいの」

いてえ、だの最悪だ、だのと言いながら、死神は足をさすりつつサンダルをはく。もはや神秘的な麗人というよりただのオジサンだ。「あの女、見た目と同じで猪突猛進だからな。底意地は悪くねえからナイフ共と遊んだあとは勝手に何処ぞに探しに出かけるさ」

「どづいつこと?」

「頭に血がのぼると、俺を殺すこと以外考えられなくなんのはなるほど。」

ガコンツと何かが駐車場に降って来る。無残に叩きつけられて変形したのは、玄関によく取り付けられている頑丈そうなドアだった。

「今日は激しいな」

あの美女が落としたのだろうか。

マンションのエントランスからハイヒールの美女が怒り肩で飛び出してくる。彼女は般若の形相で、颯爽と車の前を通り過ぎていった。

しばらくしてから、

「な? 言ったとおりだろ」

死神はさして自慢するでもなく、欠伸をする。

「でも、何でこの車に気付かなかったの?」

「ダチの車だからな」

「……………」

「さて、お姫さんをお送りしましょうかね」

死神はおざなりに言って、車のエンジンをかける。

「……………帰って、いいの?」

「一緒に居られちゃ困るんだよ。お前のせいで俺の家までバレた」
車をゆっくりと発進させる。

「あの、痛みは……………」

「知らなくていい」

死神は短く答える。それ以外に、答えを用意していないようだ。

「とりあえず、これ持つとけよ」

放り投げられて受け取ったのは、死神には似合わない、プレートの上に青い石のついたペンダントだった。

「これ……………」

「俺のだったが、やる」

死神が持っていたものはいらぬ。顔に出たらしい。

「それで痛みは抑えられる。嫌でも何でも、持っておいた方がいいんじゃないか？」

それはそうだ。背に腹は変えられない。ペンダントは、死神が持っていたことさえ除けば、女物といってもいいほど繊細で、綺麗なものだっただ。

「あとは、夢見が悪くなるかもしれないねえが、規則正しい生活と、深呼吸さえかかさなけりゃ、自然と無くなってくるだろう」

学生だから簡単だろ、と付け加えて、死神はハンドルを切る。大通りに出た。

「……悪い。俺が間違ってた」

死神は突然、渋面を作って謝った。

何事かと思い、彼が視線を注ぐバックミラーを覗いて、夕も眉根を寄せる。

見覚えのある妙齢の美女が、怪談よろしく車の後ろで浮いている。「つたく！」

死神は夕の頭を押さえつけて、屈みこむ。次瞬、フロントガラスを突風が突き抜けた。

「出るぞ」

短く告げた死神は、思い切りアクセルを踏んだ。急発進したセダンは大通りに飛び出していく。

バックミラーの女は怒髪天をついているようで、次々と風を巻き起こす。

ガラスに白い筋が幾つもできる。

その役立たずなガラス越しに、急ブレーキの音や激突する音が聞こえる。夕は耳を塞いで瞑目した。

死神の車はさすがに女をみるみる引き剥がしていくが、スピードを緩める気はないらしく、車を追い抜いていく。

ようやく止まったのは夕もよく使う駅のロータリー手前。

「降りろ」

夕を急かして、後部座席から放り出すと、運転席から少しだけ顔

を覗かせた。

「じゃあな」

「あ。ちよっと」

呼び止めると死神は、不機嫌に顔を歪めた。一刻も早く逃げたいらしい。

「これ、どうしよう……もらっていいの？」

借り物のセダンからして物持ちの良さそうではない死神が大事に持っていたものだ。本当にもらって良いのか。見ず知らずの、小娘が。

「本当に辛かったら、死ねばいい」

死神の、暗い双眸が黒光りする瞳に夕を映した。

何も言えなくなった。

ただ、ペンダントを握る。

ペンダントの青い石が、頭の芯を冷やしていく。

「……わかった」

死神は、それ以上何も言わずに、廃車寸前の車を引きずって、一口タリーの向こうへ走っていった。

これで、死神とは二度と会うことはない。

夕は夢から覚めたように、青い石を見つめる。

ふと、プレート裏に文字のような傷に触れて、裏返す。

漢字で、『如月』

あの死神の名前なのだろうか。

ふ、と苦笑して、夕は自分の日常に戻っていった。

弱りきつた体から、余力が消えていく。細波のように静かに、だが、確実に、真綿で首を締めていくように魂の旅立ちを促した。

すでに芯だけとなった命の灯火を胸に、想うのは残していったしまった彼女のことだけだった。

悔やみきれない。どうして救ってやれなかったのか。

自分はこのように穏やかな死を迎えようとしているというのに、彼女は、今なお灼熱地獄の舞台上で踊らされている。

死の床についてさえ、起き上がることさえままならない体の奥が衝動に駆られる。あの時、彼女の手を放さなければ。

これは自分に与えられた罰だ。

魂の流転は、人間の業を塗り重ねていく。

だが、これは、自分の罰なのだ。

たとえ、魂の記憶がこれを覚えていようと、これは自分の罪だ。

最後の血一滴まで、悔恨という罪に縛られつづける。

最後の一息まで。

開いたまぶたに、涙が乗っていた。

朝の日差しが寝ぼけた光を反射する。

起き上がると同時に、反射的に胸元に触れている。

冷たい、青の石。

指先でペンダントの先をもてあそびながら、夕は先ほどまで感じていた絶望的なまでの悲しみを反芻させる。

恋人でも置き去りにしてきたのか、夢の中の彼は、息をひきとるその瞬間まで彼女に詫び続けた。

夢の記憶はあやふやだが、夕の心の奥に鉛のような悲しみが深く残った。

これで何度目だ。

浅い眠りの時には、いつも夢を見た。

首を吊る夢、病床で死ぬ夢、谷に落ちる夢。

そして、二週間前に見た男のように胸を串刺しにされる夢。

いずれも自分が死ぬ夢である。

夢はたいていが場所のわからない抽象的なものだが、時には読んでいた本の内容まで覚えていることがある。

以前のような激しい痛みはない。

ただ、恐怖や慟哭といった感情だけ、刻まれていく。

辛ければ死ぬ。

いつかの死神の薄情な言葉が、今は甘く聞こえる。

幾人もの、不安や恨みを繰り返し繰り返し流しこまれるなど、悪い冗談も良いところだ。

夕はしばらく額を押さえて、ベッドから滑り出る。

この夢さえなければ、普通の日常なのだ。

死神に会った次の日、新聞やニュースで建材置き場で置き去りにしてきたはずの男の記事を探したが、小さな地方欄にも、殺人事件の記事はいつさい載ってはいなかった。

如月と言う死神に連れまわされた日から、すでに二週間は経とうとしていた。

今でも、時折あの冷たい長い指を思い出す。

柔らかな長い髪。

威圧的な長身。

耳に甘い声。

夕を抱く強い腕。

頬に触れた広い手。

青い石のペンダントと一緒にあって、夕の胸元で記憶が揺れている。

「ちよつと夕、顔色悪いよ?」

学校の渡り廊下で、加奈に覗き込まれて夕は瞬く。

「最近、ちゃんと眠れなくて……」

自分が死ぬ夢を何度も見るとはいえない。

加奈はセミロングの髪を指でぐるぐると回して口を尖らせた。

「ダメだよお。ちゃんと寝なくちゃ」

「うん……」

相槌を打ちながら、夕は眩暈を覚えた。

どうしたのだろう。

ふらりと、足がよろめく。

「夕!」

加奈が慌てて支えてくれる。

倒れはしなかったが、自分で想っていた以上に悪夢が眠りを妨げ

ていたようだ。

正直、辛い。

溜息をつくとき、加奈は心配そうに夕の頭をなでた。

「心配事があるなら、遠慮なく相談しなよ?」

こういうことを素直に言ってくれる加奈の言葉が疲れた体に響く。

涙が出そうになって、夕はこらえた。

「今日は思いつきり寝ちゃいなよ! 早退しちゃえば?」

「でも、まだ朝だよ?」

まだ登校してきたばかりでホームルームも始まっていない。

「それに今日は、数学のテストあるし」

「ああ! そうだった!」

夕にヤマ教えてもらうんだって、と加奈は口元を押さえる。

「でもさ、ちゃんと寝た方がいいよ。数学は五時間目だし……」

言葉を切って、加奈は夕の肩をつかんで、

「そうだ！ 保健室行こう！ 保健室！ 先生ならわかってくれるよー！」

と、妙に嬉しそうに言った。

保健室には、珍しい男の先生が詰めている。背が高く格好いいを体言したような先生で、当然のように女子生徒に騒がれている。赴任したのは夕達と同じ二年前だが、白衣の美形が介抱してくれるというので当時は保健室が騒然となったものだ。

今では、善きアドバイザーとして生徒たちの人気を集めている。女の友情なんてこんなものだ。

足取りの軽い加奈の後ろをついて歩きながら、夕は妙に冷めた息をつく。

保健室の先生は、正直苦手な部類だった。

先生という肩書きを白衣に着せて、本人の言動はおよそ教師とは思えない。

相談に来た生徒を壮絶な皮肉で突き放すこともしばしば。しかし、仕事だけは隙無くこなすので、他の教師たちとの折り合いも悪い。夕も、加奈が怪我をした時に保健室へついていったことがあるが、簡単な消毒をしただけで、加奈の処置を終えるとさっさと書類整理に戻ってしまった。加奈が、しばらく保健室に居るといので夕はありがたく保健室を出て行った。

ドラマに出てきそうな暑苦しい先生がいいというわけではない。だが、一応は先生らしくして欲しいというのが、生徒の願いだ。気安さで、先生を選びたくない。

ある程度の信用をおける人であって欲しい。

その点で、保健室の皮肉屋は落第点だった。

「せんせい。唯せんせい」

加奈が保健室の戸を開ける。

唯、というのが先生の苗字だ。珍しいことと、呼ぶと名前に聞こえるので、わざと使う生徒が多い。

加奈に続いて保健室に入ると、なめらかな薬品の匂いが漂った。二台のベッドと薬品棚の奥にデスクに向かった黒髪の白衣が居る。

「友達が寝不足で、体調悪そうなんですー」

聞いたことのないような猫撫で声で、加奈は唯先生の隣に急いだ。怪我をして以来、加奈はこの先生の元に足しげく通うようになっていた。彼女がご執心なのは知っていたが、目の当たりにすると複雑な気分だ。

「それで？」

椅子を回転させて、白衣が振り返る。

聞き覚えのある声だった。

いや、当然だ。一度はここに来たことがある。

夕は心の中で首を振る。

先生の声を、最近聞いた覚えなど、ない。

「夜よく眠れないそうなんですよー。さっきも倒れそうになっちゃたから」

加奈の話を聞きながら、先生は夕を見とめた。

黒髪に縁取られた白い顔に、フチ無しの眼鏡をかけている。鼻筋の通った容貌には酷薄な唇が、皮肉げに笑みをたたえている。

先生でなければ借金取りかチンピラのようなようだ。

「朝飯は食べたのか？」

睨むような夕の視線を無視して、気安さを覚える口調で尋ねてくる。

「食べました」

「生理、というわけでもない」と

保健の先生なのだから当然の配慮なのだろうが、このチンピラから聞くとセクハラをされた気分になる。

「違います」

顔色を変えて叫ぶのも癪に触るので、夕は無表情に応えた。

ふーんとおざなりに返事をしてから、チンピラ教師はデスクの上にか何かを書き付けると、加奈に渡す。

「担任に渡しとけ。コイツはここでしばらく預かるから」

「はい。わかりましたあ」

やはり嬉しそうに加奈はうなずくと、今度は自分の話題に取り替えた。

「この間の話、考えてくれました？」

加奈は白衣の肩に手をおいて、甘えるように目を細める。

「却下」

女子生徒に甘えられてまんざらでもない顔をしているというのに、不良教師は容赦なく言葉を切った。

「ええ！ そんな！」

「なんで俺が、モデルの真似事をやらなくちゃならないんだ。他あたれ他」

しっしつと薄情なしぐさで加奈を追い払う。

加奈は頬を膨らせている。そういえば、彼女は服飾デザイン部に入っている。見た目はモデル並の先生は、放っておけない存在なのだろう。

「あきらめませんからね！」

それを捨て台詞に、帰り際、夕の手を握る。

「夕からも説得しておいてね」

堅く握られて、夕もおざなりに頷く。

戸が閉められてから、予鈴が鳴った。加奈はホームルームに間に合うだろうか。

保健室には、チンピラ教師と二人きり。

胸のペンダントが揺れた気がした。

黒い髪を見ていると、奇妙な既視感を覚える。

見覚えはある。

それはそうだろう。保健室に来たことがないわけではない。

それに、非常識な長い髪ではない。

だが、眼鏡の奥にある漆黒の双眸はどうだろうか。

艶やかな黒瞳にくつきりと自分の姿が浮かんだ。

先生が椅子から立ち上がる。

正面に立たれると、一步下がりがりたくなるような、覚えのある威圧感。

そんなはずがない。

ドア先に突っ立っていた夕を掠めて、先生の指が戸の、内側からかける錠を下ろした。

鍵のかかる音にギョツとして思わず不良教師の顔を見つめる。

口の端を上げただけの笑み。

見たことがある。

二週間前。

まさか。

「久しぶりだな」

聞くことも無いと思っていた。

「まだ元気そうじゃないか」

加奈と話していたときとは違う、あの時と同じ甘い声。

「……………如月……………」

死神だ。

「自己紹介なんかしたか？」

面白がるように、白衣を着た死神は笑う。

「ペンダントの裏……」

「ああ、そうか」

無造作に死神は夕の首筋に指先を近づける。

夕はとっさに手で弾いた。

睨むと、死神は怯むどころか余計にからかうような笑みを深めた。

「さつきは物怖じもしなかったのに……友達の前だったからか？」

「さつき……？」

「生理うんぬんはセクハラ発言だぞ」

当の本人に指摘されて顔に血が上るのがわかった。羞恥心より、

この死神をすぐ殴らなかつた怒りだ。

「まさか会うとは思わなかつただろ」

「……教師の裏口就職は聞いたことないですよ」

機を逸した拳を収めて、夕は敵視を剥き出しにして睨む。

「知ってるだろ？ 俺は普通の保健医」

確かに、この死神は二年前に赴任してきたのだ。ごくごく普通に。

「普通の保健医は、生徒を保健室に閉じ込めるものなんですか」

「誰かに聞かれるとマズいだろ」

「何を？」

死神は夕の肩に手を置いた。

今度は避けられない。

広い手に肩が押さえつけられている。

白い顔が屈む。

暗い瞳が夕を捕えた。

その眼光に負けまいと、夕は顔をしかめた。

「……お前なあ」

鼻先に死神の吐息が触れた。

「フツ―は、怯えるとかいう可愛い仕草があるだろうが」
「はぁ？」

ケンカの極意は相手から視線を外さないこと。海外出張中の兄がよく高説をたれたものだ。

「私にケンカを売ってるんじゃないんですか」
それに、

「ペンダント、まだつけてます。ご心配なく」

確かめるような手つきで死神の指が首でさまよっていたのだ。

死神は苦笑すると体を離す。

「お前、兄貴いるんだろ」

「え？ 居ますけど」

自由になつた体から埃をはたくよう死神の触っていた部分を払う。
首筋にも感触が残っていて気分が悪い。

「彼氏いないくせに男慣れしてる」

「なっ……」

「友達選べよ」

加奈が喋ったのか。

ふらついていた体が余計に重くなつたようだ。

「おい、大丈夫か？」

寝ぼけた質問だ。調子が悪いから保健室にいるのに。

夕の体を支えようとすると死神を押し退けてベッドに向かう。

「本当に寝不足なんです」

一歩踏み出す。

風が舞った。

あるはずがない。

保健室の床から風が起こるなど。

しかし一瞬の風のあと、とつさに足元に目をやると、直径二メートルほどの円状に、床が変色している。

淀んだ泥沼のような、血のような色に。

床が、ずぶり、と鳴る。

突然、靴底が泥に囚われたように沈んだ。

「なに、これ……！」

足を動かそうとするが、泥に捕えられている。じたばたしているうちに泥の中から空気の抜けるような泡が次々と現れた。泡がはじけると、泥の中から、細い枝のようなものがせり上がってくる。

ずるずると嫌な音をたてながら、細い枝が五本。

違う。

人間の手だ。

泥に塗れた人間の腕が、見る見るうちに伸びてくる。泥の間から見え隠れする、黄ばんだ棒は骨だろうか。

そう思ったとたんに、意思のなかったはずの手が夕の右足をつかんだ。ぬるりとした感触が、靴下の上から伝う。

夕は悲鳴もあげられず、自分の足をつかんでいた。だが、左足も、いつのまにか泥から現れた白骨の手につかまれている。生温い肉の腐臭と、恐ろしいほどの力でつかむ手が、ごつごつとした骨の異物感を伴って痛いほど夕の足首をしめあげる。

「はなして！」

そう言っただけで放してくれるとは思えないが、叫ばずにはいられなかった。しかし、抵抗とは裏腹に足首をつかんだ手は泥の中へと足を引きずりこんでいく。血臭が鼻をついた。腕は一本だけではなくなっている。何本もの腕が、足や手に触れる。

「ちっ」

聞き覚えのある舌打ちで顔をあげると、死神も腕に足をつかまれている。夕は恐れよりも怒りが勝った。

「アンタのせいじゃないのっ？」

「こんな趣味の悪いことするか！」

死神は手を掲げた。

どこからともなく砂が彼の手の平に集まって、粒子が一瞬にしてあの、三叉の槍を作り上げる。同時に、死神の髪が、いつか見たよ

うに異常な速さで音をたてて伸びる。

腕が槍を取り上げようと幾つも死神の足にまとわりつく。

間髪入れず、死神は切っ先を泥に突き刺した。

鈍い音が槍に手ごたえのあったことを告げる。

「ああああああああああああつ！」

地鳴りのような、何百人も固めたような悲鳴が聞こえ出す。

「散れ！」

低く響いた声で、悲鳴が一つ一つに解かれて、浮かび上がっていき

次々と消えていく中で、夕の足首をつかんでいた腕も耳を塞ぎたくなるような悲鳴をあげて碎けていった。

血色の沼は淀んだうめき声をあげて、地の底に沈むように円を締め

あとには、元通りの保健室の床が残った。

足から力が抜けた。

夕はその場に座り込む。

緊張し通しだったのだ。

靴を抱えたまま動けなくなる。

ふと足首の靴下をさげしてみる。

やはり手形に青くなっていた。

朝から最悪だ。

「おい」

そんな名前じゃない。

夕は顔を上げずに頂垂れる。

柔らかく、床に黒髪がついた。

風景がにじむ。

水をかぶった時のように、歪んで、落ちる。

自分のひざに水滴が落ちた。

腕に広い手が添えられた。

だが、それにかまわず靴をきつく抱きしめる。

「……可愛くねえな」

苦笑が降ってくる。

そんなことはわかっている。

だが、一人で泣くことに慣れていく夕にとって、人肌は刺激的すぎる。

甘えて、離れられなくなる。

「気が済んだら、好きだけ寝ていけ」

ふわりと黒髪が去った。

夕は物足りなさを感じながら、ほ、と息をついた。

午前中の傾いた日差しが緩やかに差し込んできた。午後になれば、保健室は暖かくなる。

一時間目を半分過ぎた頃、ようやくノロノロと衣擦れが後ろから聞こえた。

泣き疲れた少女が、ゆっくりとベッドに入っていくのを気配だけで確認しながら、如月きづきは借りてきた名簿に目を通す。

臯月 夕。

二週間前は音だけ聞いて、危険だと思ったが、この名前は非常にまずい。

夕は、月に属する最たる漢字なのだ。

ますます、この少女を殺すわけにはいかなくなった。

死なせる方法なら幾らでもある。

だが、自殺でもしてくれない限り、如月自身が強要することさえできない。自殺へ精神的に追い詰めていくことは容易い。しかし、その弊害がどれほど跳ね返ってくるか、試した記憶がないので自分の体を実験台にする気にはなれない。

そもそも、あの十七歳の少女が悪夢に耐えられるとは思っていなかった。

何度も何度も、自分が殺される夢だ。

普通の神経なら、三日と経たずに自殺したくなる。

しかし、夕という少女は生きている。

彼女が精神的に強いとは思えない。当たり前前の神経の持ち主だ。だとすれば、少女が元々持っている絶望が、死よりも深いという推測だけが残った。

あの半月の晩。

公園の前で、ブレザーにチェックのスカートの制服を見たとき、この学校の生徒だとはすぐ知れた。殺し損ねた後、いつか会うだろう

ことも。

だがそれは葬式の時だと思っていた。お慰みに参列して、顔を確認できれば、それでいいと考えていた。

彼女の友人を介して様子を見ることもできる。

一週間も待てば、大なり小なりの結果が出るだろう。

そう確信していたというのに、二週間経っても忘れかけた彼女の顔を見ることはなかった。

今日、ようやく会うことができたが、まだ、図太くこちらにケンを売る元気がある。だが、死者たちに地獄へ引きずり込まれそうになって、恐くて泣いてしまうような少女が、繊細なのか、無神経なのかは測りかねた。

鞆だけを後生大事に抱いて、人にすがろうとも、声をあげようともしない、強情で、今にも折れそうな泣き方をする少女だ。

その感情のぶれが、彼女を現世に止めている。一貫しない感情が、少女を自殺から救っているようでもあった。

彼女の中に押し入ったスケベ野郎が彼女の名前まで知っていたとは考えにくい。思春期の感情の揺れを利用して入り込んだのかもしれない。

抜け目のないことだ。厄介事を見事に残してくれた。手放しの賞賛とともに、恨みの溜息が漏れてくる。

セダンを廃車同然にただけでは済まないらしい。

分厚い名簿を閉じて、席を立つ。

カーテンに囲まれた、二つある白いベッドの片方に、頭を乗せている枕を抱くように寝ている少女がいる。

開けている窓から入り込んだ風がいたずらにカーテンをなびかせた。淡く溶け込む陽光が、浅い海の底のように波打つ。少女は、その光が眩しいのかうつぶせになって顔を枕に押し付けた。

それでは息ができなくなる。

「起きてるか」

呼びかけると、布団からはみ出した細い肩が揺れた。

嫌がるだろうと思ったが、ベッドの端に腰掛ける。案の定、器用にうつぶせのまま身動きして逃げていく。

「その格好じゃ苦しいだろ」

「……顔あげたくない」

「どうして」

「ひどい顔だから」

枕で曇った声に、思わず笑う。

「そんな風に、笑うから」

「もう笑わない」

ベッドの端に逃げ場はない。少女の肩をつかんで、仰向かせる。

泣いたばかりの、赤い目が睨んでくる。

「……泣いてる女、てのはもっと可愛い顔してるもんなんだがな」

この少女は、今にも噛み付きそうだ。

「……そういうことばかり言っていると、本当にセクハラで訴えますよ」

「口を塞ぐ方法なら幾らでもあるさ」

極悪人の台詞を吐いて笑ってみせると、少女はますます眉を釣り上げた。それでもベッドから離れられないのは、本当に調子が悪いせいだ。

そつと、獣を馴らす要領で不意をつくように少女のまぶたを閉じた。

手の平に、戸惑いが伝わってくる。

「何もしない。眠れよ、今は」

やがて、戸惑いがあきらめ混じりに落ち着くと、呼吸が規則的にゆっくりとなった。

彼女の疲労も限界なのだ。

「……本格的に、引き剥がす算段をたてないとな……」

そうすれば、何かがわかるのかもしれない。

不確かな答えが、目の前を通り過ぎた気がした。

数学のテストは、四時間目まで寝たせいか、思ったよりも点数が良かった。

本当はまだ少し眠かったのだが、昼休みに、いつまで経っても戻らない夕を心配して、加奈が様子を見にきてくれたのだ。昼御飯の前だったので、死神は適当に夕を追い払った。

夕が眠るまで、あやすようにずっと頭をなでているようなことをするくせに、用が済んだら見向きもしない。よくわからない男だ。

結局、夕もおざなりに礼を言っつて、保健室を後にした。加奈が興味津々で夕に質問を投げてるのだ。

「先生は優しくしてくれた？」

「具合はどう？」

「体はおかしくない？」

「どこまでいったの？」

途中から意味不明な質問になってきたので、数学のテストの話題に切り替えた。彼女もそれが気がかりだったと見えて、すぐに乗ってくれた。加奈の質問に答えるのも嫌だったのだが、保健室を一刻も早く出たかったこともある。

不気味な腕に足をつかまれて、恐かった。

解放されたら、ほっとして泣き出してしまった。

死神の、まぶたに触れた冷たい手をまた拒めなかった。

真っ直ぐ死神を睨むことしかできなかった。

死神と、これ以上一緒にいたくない。

悪夢のような出来事も、ただの夢と片付けておいた方が良い。

悪夢がこれ以上増えるのかと思うと気が重いが死神と関わらずに済むならその方がいい。

だが、加奈は六時間目を終わった頃にこんなことを言い出した。「先生と親戚なんだって？」

耳がおかしくなったのかと思った。だから夕は間髪入れずに聞き返す。

「誰と、私が親戚なの？」

いぶかる夕を話の手前で置き去りにして、加奈は「またまたあ」とカラカラと笑った。

「だから、唯先生と、夕が遠い親戚だって」
初耳だ。

突然降って湧いたとしか思えない関係だ。

出所はわかっている。

手に持っていた掃除当番のホウキを加奈に押し付けた。

彼女の抗議は当然無視して、夕は自分の鞆をつかんだ。

下校時間の人ごみは、掃除のざわめきに変わって少し経つ。

まだ保健室にいるはずだ。

三階から一階に駆け下りて、職員室の南側。校庭に向かって窓を開いて、

「この疫病神っ！」

椅子を回転させてこちらを向くと、長い足を高らかに組む。

「よう」

戸が壊れるほどの大音量で開いたというのに、お伽話の中から抜け出てきたような男は白衣を着たまま、おおらかに挨拶を返している。

夕は大股で保健室を横断し、椅子に座ったままの白衣の襟をつかむ。

「どういう理由か説明してもらいましょうか」

「何を」

涼しい顔で聞き返してくるので、夕は疫病神に頭突きをするように顔を近づけた。この話題は声を大きくできない。

「私と、アナタが親戚だって話です！」

あーアレね、と疫病神は呟いて欠伸をする。

「もうお前に喋ったのか。お友達は。律儀だなあ」

「どうして、私とアナタが親戚なんですか！ 会ったこともなければ、名前すら聞いたことありませんよ！」

「それはそうだ。俺もお前と縁戚関係になった覚えは無い」

「当然です！ 何でこんな話、加奈にするんですか！ 加奈が噂話を広めたら、一日と経たずに学校中に知れ渡りますよ！」

「歩く速報だからな」

加奈の広い交友関係と、お喋りな性格は今に始まったことではない。何を隠そう、この疫病神の報道を担当したのは加奈だ。彼女があちこちで彼のことをあることないこと喋ったため、今の人気がある。

「それがわかってて……」

「じゃあ何か」

不意に疫病神が夕の言葉を切った。何を改まって言うことがあるのだろう。夕も同じように口をつぐんでしまう。

「恋人の方が良かったか？」

夕はそのまま疫病神の額に頭突きを見舞った。

ゴンッ！

なかなかの快音だった。

夕の頭も赤くなっただが、疫病神は思わぬ攻撃に額をさすっている。

「何すんだ！」

「こっちの台詞です！ 取り消してください！ 今日中なら間に合います！」

「相変わらずイー度胸じゃねえか。それだけ肝が据わってりゃ、俺と暮らすなんざ楽勝だな」

疫病神は額をさすりながら悪魔のような笑みを作った。

「……はあ？」

天地がひっくり返っても、加奈が無口になってもこれほど呆れはしない。

「頭がおかしくなっただんですか？」

さきほどの頭突きの打ち所が悪かったのかもしれない。

「事情が変わった」

疫病神は苦笑するように口の端をあげた。

「俺にも色々事情つてもんが変わってきてるんでな。悠長にお前が自殺すんのを待ってやってる時間がなくなった」

「なんですかそれ？」

二週間前は、あとは自分次第だと言っていたのに。

「亡者どもにお前が狙われ出したからな。さっきのアレだ」

足首のアザが痛くなった。顔色を変えたのだろう。疫病神も笑みを収めた。

「あれはな、簡単に言つと、体を無くして行き場をなくした死者どもだ。いつも俺や、お前の中にいるヤツの体を引きずりこもつと狙っているのさ」

私の中に、誰がいる。

「じゃ……じゃあ、私は、私の中にいる人のせいで、狙われたの？」

「そういうことになる」

疫病神が真顔で頷くが、信じられるはずがない。

「ちよつと待ってよ！ じゃあ、あの胸の痛みは？ 悪夢は？」

「説明しだすとキリがないな……」

少し呆れたように、疫病神は溜息をついて、

「お前、魂は信じるか？」

よくある宗教勧誘の台詞を口にした。

「何？ 今度はお説教でも始めるの？」

「まあ、聞け。俺だって坊主じゃねえよ」

そう前置きしてから、疫病神は夕を見据えた。

「俺達の考え方じゃ、魂つてのはそいつの本質だ。本能は体が持つてる。そうじゃないもの、考えたり笑ったり怒ったりする人格そのものを、魂と考えている」

「……俺達？」

「とらえ方はいくらでもあるからな。……で、名前つてのをつけられると、魂に刻まれるわけだ。お前が皐月夕であるように、俺も如

月という一人の人間になる」

「つまり、魂は同じでも、別の名前が刻まれて、別の人間になるってこと？」

「そうだ。エラいぞ」

小学生を褒める先生のように笑って、疫病神は続けた。

「だから、お前も持つてるんだよ。臯月夕っていう魂を」

疫病神の理屈の上では、そうだ。

「魂自体は皆、一人一つずつ持つてる。死んだ時、まっさらになつた魂をな」

「だから、同じ魂でも違う人なの？」

「そう。名前を書き込まれて初めて人になるんだ。

…とまあ、

これが俺達の理屈だ」

「どうして、それが絶対とは言わないのよ」

「言っただろ。とらえ方一つで、物事は違って見えてくる。俺の理

屈は、転生とは少し違うからな。まあ、ここままで前置き」

「前置き？」

「ここからが本題だ。魂の考え方はとりあえず頭に叩き込んだら？」

とりあえずは、だ。夕が肯くと、疫病神は満足したように進める。

「そこで、だ。魂が人の本質だとすると、本能となる体に幾つ入るもんだと思う？」

自我が分裂することを、わざわざ分裂症と呼ぶのだ。本質となる魂と本能は一对、

「体に一つしか魂は入れないんじゃないの？」

「そうだな。だから、体に二つも魂が入ると何らかの害が出てくることになる」

もしかして、

「……胸が痛んだり、悪夢を見たたり？」

「勘がいいな」

夕は押し黙って、制服の胸をつかんだ。

「今、お前の中にいるのは、この前お前を抱えて住宅街疾走した野

郎だよ」

二週間前、この疫病神に殺された、あの人が、

「……………この中にいるの……………？」

「自分の死ぬ夢を見るだろ？」

そう。

いつも死ぬ夢だ。

苦しみながら、地獄に落とされる夢。

「それは、アイツの記憶だ。アイツの魂が、お前の魂に干渉しているんだ。胸の痛みは、俺がこの前刺したものだろ？」

ためらいもせず、黒髪の悪魔は真っ直ぐに夕を見つめた。

「……………アンタを殺せば、魂は出て行くの？」

漆黒の双眸を睨み返して、夕は小さく言った。

「わからない」

無責任な死神は、自分の命さえどうでもいいと言うように、手を振る。

「俺を殺しても、そいつが満足するとは思えないんでな。手っ取り早く魂を剥がすには、お前を殺してみるのが一番いい方法なんだが」
喉にゾツと、公園の前で突きつけられた槍の感触が蘇る。

夕は首を押さえて、体を引いた。

死神が、夕の腕を取る。

何度目だろう。

この死神にとらえられるのは。

「安心しろ。俺にはお前を殺せない」

信じられない。

あの半月の晩、確かに死神は夕を殺そうとした。

「だから、魂を剥がす方法を試してやる。お前の家に泊まりこんでな」

「……………は？」

何を言い出すのだ。

おびえていた自分が馬鹿のように、夕は顔をしかめる。

「お前ン家、普段は家族全員出張で、誰もいないんだろ？」

何処から調べたのかわからない情報を口に、死神は甘く笑む。

「俺の家はリフォームにあと一ヶ月はかかるからな。ダチの家暮らしも楽じゃねえんだ」

「そんな、勝手に……」

「親戚だろ？ 俺達」

やはりおかしくなったのだ。

夕は右の拳を固めた。

もう一度殴ってみれば直るかもしれない。

そう、信じていたかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8272k/>

しろがねと月

2010年10月14日17時52分発行